

随想

デジタルとアナログ

～アナログセンスの大切さ～

加藤 宏光

著者がコンピューターに携わったのはもう二七年も前のことになる。当時8ビットマシンが主流で、もっぱらハードの開発と販売がメインであり、松下電

器産業(株)(現在のパナソニック(株))、富士電機(株)や(株)東芝、NEC(日本電気(株))等、そうそうたるメーカーがテレビを通じてハードの売り込みにしのぎを削っていた。しかし、当時コマースhalを見てもそのパソコンを購入して、何に使えるのかは判然としなかった。

著者も、コンピューターの何たるかを知らず、コンピューターを紹介する書物をひも解いたりして試行錯誤していたが、『ま

始める以外に道はない』と悟った。そこで、当時ポケコンと呼ばれた、カシオ製4ビット簡易練習器(PB300と銘打たれたポケコン)を購入して、Basicと呼ばれる言語を学び始めた。それから約一五年の間、実際Windows時代に至るまでは、必要なプログラムを自作して仕事に供していたものである。

一つひとつの仕事をそれぞれコンピューターで処理するのは、別個の専用プログラムを作成して動かせばよいが、業務全体をトータルで処理できるようにするためにデータベースを含めたシステムが必要で、それを組み上げるのには一〇年以上かかってしまった。そしてそれ

がほぼ完成した時にはWindows時代が始まっていた。

「七〇の手習い」で大学の退職金を充てて購入した機械で、コンピューターを始めた父も当初フォートランという技術系プログラムをもてあそんでいたものの、Windows3.1という極めて初期のWindowsがマイクロソフトからリリースされると、父は直ちにそれに移行し、電話するたびに著者にもその利便性を語った。八〇歳の親父と五〇歳の息子が深夜に電話で、Windowsの利点や欠点を延々一時間以上も語り合うのは、奇妙な姿であったらう。

そして、Windows98になった時点では、これをベースとし

たワープロや計算ソフト、あるいはデータベースソフトが世間を席巻してきた。

少し専門的になるが、かつてのMS-DOSという基本ソフトをベースとして動く高級言語(BASIC等)で作成されるプログラムは、作業行程に従って機械側がデータを要求し、すべてのデータを入力した段階で、プログラムに想定した手順で計算し、結果を表示(出力)する。

一方、Windowsにおける市販プログラム(表計算等、例えばXCEL)は、数値等の情報を扱う人が自在に入力し、計算方法も選択して計算させる方式である(これをOBJECT指向という。もちろんBASIC時代のよ

うな単一目的へ一方方向性に結果を求めるプログラムを組むこともできる)。

かつて、著者もやっていた「手計算、手記述、手描写」によるデータ処理によって著者の研究所で処理しているデータを作成した場合には、多分現在二〇人のスタッフ数が五〇人でも不足するであろう。コンピューターの能力はさすがにすごい。先日の朝日新聞に次のような記事があった。

コンピューターが若い世代だけでなく社会に浸透し、さらに新しいコンセプトのハンディーなものとして、「iPad」のようなコンピューターが当たり前に扱われるようになった。会議室にこれらのコンピューターが持ち込まれることも多い。

その結果顔を上げて議事を聞く人間が少なくなり、人の意見をひたすらコンピューターに入力する姿が多くなった。ひどい場合には話している担当者以外は、ほぼ全員が顔を下に向け画面と対峙している。

最近大企業が増えてきたテレビ電話会議も、同様に顔と顔を合わせ意見を聞き論を交えるケースが少ない。「デジタル化の弊害が顕著である」という。

著者自身、今日激しく動いている社会のデジタル化には、いさかならず辟易とする感を否めない。書物さえ電子書籍としてデジタル化され、従来の書籍の売上額がドンドン低下しているという。著者は子どもの時から速読が癖で、今でも大阪等への三時間程の旅をすれば、その週の週刊誌三〜五冊に加えて、少なくとも三〇〇頁程の文庫本を二〜三冊は読む。それらのうち気に入らない小説を除きほとんどを持ち帰ることになる。それゆえに蔵書数はかなりのものとなる。では、これらは書棚の肥やしとなっているのか。意外にそうでもない。

経済や社会構造をさまざまに考察したい時には、それなりの人が書いた書物を参考にする。とはいっても、プロの物書きであっても将来の条件をすべて考

察に含めることはかなわない。たとえば、二〇一〇年に日下公人氏くさかきろが書いた書物に「日本と世界はこうなる」というものがある(この書物は、中古本屋で昨年十一月に半値で購入した)。日下公人氏は著者の大好きな方の一人で、技術系でありながら社会構造から近代歴史に至るまでさまざまな見識を基に優れた予測や洞察を続けておられる。この書物にも著者自身が感じたこと、現在共感を持てる思考が多い。

しかし、さすがの氏も二〇一〇年時点で昨年3・11の大震災とそれに続く原発事故の発生は条件に入れられていない。現状と対比しながらこの本を読むことで、得られる示唆は格別である。電子書籍ではこうした書物の実力は果たしようもない。

人と人が社会を形成し、維持していく上で、アナログセンスが必須であることはいかに時代がデジタル化しても変わらない。デジタル時代にこそアナログは最先端なのである。